

## 研究・調査報告書

分類番号	報告書番号	担当
A-11C	17-043	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門 三浦克之
<b>題名（原題／訳）</b>		
Alcohol metabolism and oesophageal cancer: a systematic review of the evidence. アルコール代謝と食道癌: 系統的レビュー		
<b>執筆者</b>		
Matejcic M, Gunter MJ, Ferrari P.		
<b>掲載誌</b>		
Carcinogenesis. 2017 Sep 1;38(9):859-872. doi: 10.1093/carcin/bgx067.		
<b>キーワード</b>		<b>PMID</b>
飲酒、喫煙、食道癌、遺伝子多型、腸内細菌		28645180
<b>要 旨</b>		
<b>目的：</b> アルコールは、食道癌(OC)の中でも世界中で最も罹患の多い組織型である食道扁平上皮癌(OSCC)の主要な危険因子である。アルコール代謝は、その活動性や発現が遺伝子多型によって影響を受ける特定の酵素によって規定されている。本研究では、喫煙やアルコール脱水素酵素(ADHs)・アルデヒド脱水素酵素(ALDHs)の機能的多型を含め、飲酒と食道癌のリスクに関する疫学的エビデンスの系統的レビューを行った。		
<b>方法：</b> MEDLINE、EMBASEにて2016年11月までに公表された、人を対象とした疫学研究を探索し、系統的レビューを行った。		
<b>結果：</b> 地域におけるOSCC発生の高低にかかわらず、飲酒の頻度・量は一貫してOSCCリスク上昇と関連していた。最も大きなリスクが報告されたのは喫煙者においてであり、喫煙が無い状況においては飲酒とOSCCリスクの関連は小さかった。ADH1B, ADH1C, ALDH2の遺伝子多型はアセトアルデヒド代謝の修飾、飲酒傾向を介してOSCCリスクと関連していた。腸内細菌の研究では、飲酒曝露により特徴的な細菌叢の変化を来す可能性が示された。		
<b>結論：</b> ADH1B, ADH1C, ALDH2などの遺伝子多型は飲酒量データにより補完されれば、メンデルランダム化試験における飲酒曝露の代理指標となり得る。最近の飲酒と食道癌発生の研究からは、腸内細菌がアルコールによる食道発癌の機序を解明する新たな研究の潮流となる可能性が示される。飲酒関連の細菌群は、介入の必要性が高い人を識別するバイオマーカーとして使用できる可能性がある。		